

3 神々と神社の成り立ち

(1) 白山神社の4祭神と9境内社

拝殿の前にある昭和3年に作られた木製の「白山神社由緒標」(昭和天皇の御大典記念として作成)をみると、祭神は「菊理姫命」です。

合祀祭神「応神天皇」、「木花咲耶姫命」、「素戔鳴尊」とあり、大正元年9月25日に村中(八ツ家島)の八幡社「応神天皇」、それと河戸(道下島)の浅間社「木花咲耶姫命」と津島神社「素戔鳴尊」を合祀したとしています。



白山神社は白山の白山比咩神社の祭神の「菊理姫命」一神でした。

明治末の松河戸には、各島には9社(各島の境内社5社と昌福寺の1社を含めると15社)の神社がありましたが、大正元年に、白山社へ合祀(4社)又は境内社(10社)とし、白山社は白山神社となり、松河戸の「村社」となりました。

(1市内にある白山ン神社

p4の松河戸村絵図と表を参照)

白山神社由緒標	
一、 所在	鳥居松村大字松河戸 字河戸六百六拾九番地 鎮座
一、 社格	村社 大正十三年九月二十六日 神饌幣帛料供進指定
一、 祭神	菊理姫命
一、 合祀祭神	應神天皇 木花咲耶姫命 素戔鳴尊
一、 由緒	社傳明カナラス大正元年九月 二十五日字村中千六百四十四番地鎮座 元無格社八幡社字河戸七百五十 六番地鎮座元無格社浅間社字 河戸七百四十五番地鎮座元無 格社津島神社尾ヲ合祀セリ
一、 例祭	十月十六日
一、 神境	参百九拾貳坪
昭和三年十一月 御大典記念	

合併された後の旧社地は畑になっていましたが、終戦後、祟りがあるというので旧社地に小祠が建てられました。

各島から白山神社(氏神)までは距離があったので、島の人達の朝晩の参拝は、これら近くの小祠でおこなっており、区画整理が行われるまで残っていました。

(平成5年以降、残っていた小祠も、白山神社に合祀されました。)

したがって、我が町の白山神社は、多くの神々を祀った神々の集合体であります。

白山神社に、どうして多くの神々が集合されたのか。

松河戸の神々と神社の変遷について、歴史を遡って調べてみることにしました。



戦後、旧社地に小祠が建てられた。

(2) 松河戸の神社創建と神々

① 自然崇拜、祖先崇拜

松河戸土地区画整理事業に伴い遺跡発掘調査(1996年1月～1998年11月)が行われた松河戸遺跡からは、稲作農耕が日本に伝わってきた段階での弥生前期の「環濠集落」が確認されており、縄文時代の晩期から弥生前期の土器や石器、木製品など生活道具とともに、土偶や石棒、土製人形など「祈り」や「まつり」の道具が環濠と河道内から出土しています。



土偶 (松河戸遺跡)

自然に宿る精霊や先祖の霊が、人々の日々の生活に大きく影響していると考えており、雨が降らないときに行う「雨乞い」、長雨のときに行う「日乞い」、害虫を追い払えるよう祈る「虫送り」、豊作に感謝して行う「秋祭り」など、現在までおこなわれていたような精霊や先祖の霊をまつる祭りがすでに行われていたようです。



石棒 (松河戸遺跡)

何も災害がなかったことに太陽や雨という自然物への感謝が生まれるようになります。

また、先祖が開いた農地に植えた稲が育つことから先祖への感謝が生まれ、その考えが徐々に広まると、祖先を祀る働きが生まれ、「自然信仰」と「祖先信仰」が人々の日常の中に生まれていきました。

そして、古代の人々は目に見えない神が、山や滝、樹木、巨石などの依り代に依り憑くと考える「自然崇拜」とともに、「祖先崇拜」が現れます。

特に松河戸は農耕地帯であったため、洪水、灌漑、豊作を願う水神碑が多くみられます。

(神社境内にも水神碑があります。)

自然と神とは一体として認識され、神と人間を結ぶ具体的作法が「祭祀」であり、その祭祀を行う場所が「神社」であり聖域とされました。



土製人形(松河戸遺跡)

環濠内より検出され、全長(残存部)61ミリ、幅34ミリ、厚さ8ミリ(幅、厚さとも最大部)で両足は欠損しているものの全身を表現しており、右腕は肩からやや下がりが味に伸び、左腕を腰にあてた姿勢がうかがえます。

首の部分には、首飾りを表現したと思われる細かい刻みと左肩から胸にかけて襷(たすき)掛けした痕跡がみられます。

写実的であるという点で明らかに「縄文土偶」とは異なる系譜のもので、伝統様式と外来様式の錯綜する尾張地方での精神世界や生活を考えるうえで大変貴重な資料といえます。

平成13年度 市教育委員会
松河戸遺跡展から

松河戸村に「神社」という形態が生まれるには、「村落」という自治組織が生まれる室町時代まで待つこととなります。

② 中央政権の動向

6世紀半ば仏教が朝鮮半島の百済から日本に伝えられると、仏教は急速に日本中に広まり、人々は「神」と「仏」は同じものとして信仰されるようになります。

明確な教えや煌びやかな仏像・寺院の影響は大きく、それまで祀っていた日本の神々と仏教との信仰の整合性が議論されますが、やがて、両者は同じ神(仏)であり、姿を変えて現れたという、神仏を同一視する考え方が生まれてきます。

こうして8世紀頃からこの「神仏習合」の考え方が広まります。

この時期に日本最古の歴史書「古事記(712年)」、「日本書紀(720年)」が編纂されています。

古事記や日本書紀に現れる神々は、神仏習合観念、やがて仏教の仏を本体とする「本地垂迹説」として理論化されるようになりました。

仏、菩薩が仮に神の姿となって現れたとし、たとえば「阿弥陀如来の垂迹を八幡神」「大日如来の垂迹が天照大神」「薬師如来の垂迹が素戔鳴尊」などとなりました。

※ 古事記は、日本に文字がなかった時代に口から口へ伝えられてきた神話の数々を初めて文字にして天皇の神格化を歴史書としてまとめられました。

稗田阿礼が読み上げ、太安万侶が筆録する形で編纂がすすめられた。

※ 日本書紀は、しっかりとした国家の歴史観を打ち立てるために大和王権が公式の歴史書として作成されたもので、律令国家として歩み始めた当時の日本には、天皇による統治の正統性を内外に示す必要性があったと思われます。

天武天皇の命で681年から国家が編纂した正式な歴史書になります。

また律令制度が確立し、主要神社を国が管理する「神祇制度」が生まれます。

さらに905年に成立した「延喜式」により神祇官や地方行政官である国司などによって祭祀が行われるようになります。

そして全国で2,861社の神社(3,132座の神々)が選定され序列化されました。

仏教と集合したそれらの神々を、一族の繁栄や勝利祈願のために信仰し、経済的援助をしたのはもっぱら天皇家、貴族、武家武将らでありました。

【参考】 神社の社格

●平安時代に定められた社格

朝廷から幣帛(へいはく)(神への捧げ物)が奉獻される神社を「官社」といいますが、「延喜式の神名帳にはその官社のリストが掲載されています。

延喜式に掲載されている神社の数は、2,861社で、これらの神社は「式内社」とも呼ばれ、格式の高い神社とされ、神祇官の管轄である「官幣社」と、国司の管轄である「国幣社」に分けられ、それぞれ大社と小社にさらに分かれています。

延喜式に掲載されていない神社は「式外社」と呼ばれました。

●近代社格制度(右図)

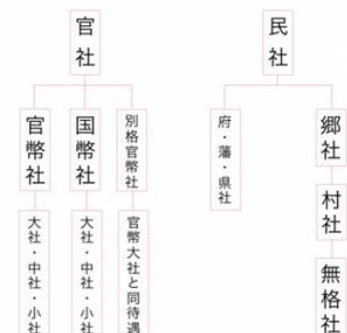
明治時代には、延喜式を基に近代社格制度が整えられました。

●現在は、昭和21年にGHQによる神道指令によって制度としては廃止されました。

社格とは異なりますが、各神社庁では内部的に神社の等級がなされています。

春日井市内の神社(S47)55社 その内 旧県社(2社)…内々神社(内津町)、伊多渡刀神社(上田楽町)
旧郷社(3社)…白山神社(二子町)、松原神社(東山町)、小木田神社(小木田町)

【明治時代に定められた社格】



③ 松河戸村の守護神社の建立

中央の動向とはお構いなく、松河戸村では昔ながらの「自然崇拜」「祖先崇拜」がおこなわれていました。

室町時代になると、荘園の力が弱まり、現在の村(村落)が起り始めます。村落という自治組織が生まれると、最小自治組織である島の中核として、各島では、守護神を祀るため神社を創建することとなります。

中央組織の「官社」とは異なる、鎮守の森で祀られる氏神様は、大衆信仰として地域に根ざし、四季折々の中で、その時々のお恵みを祈ったり、収穫を感謝したり、疫病退散などの祭りが行われ、村人の集合の場所として益々盛んになります。

それは、島の人々の氏神であり、鎮守の神、産土神でもありましたので、島の人達の朝晩の参拝がそこで行われました。

明応3年(1494)には、白山神社再建(棟札の記録)や、十五の森悲話(伝承)が生まれました。

このころから、島ごとの神社などもでき、松河戸の観音寺、昌福寺もこの時代(少し後)に創建されています。

④ 崇敬神社の神々

江戸時代になると、ようやく松河戸の各島においても主要な神社(崇敬神社)から祭神を分霊するようになります。

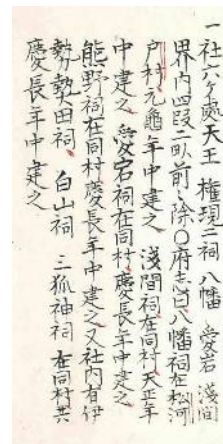
門田島は白山の^{しらやまひめじんじや}白山比咩神社から「菊理姫^{くくりひめのみこと}命」を分霊し白山宮とし、道下島は津島神社から「素戔嗚尊^{すさのうのみこと}」を分霊し津島神社(天王宮)、浅間神社から「木花咲耶姫^{このはなさくやひめのみこと}命」を分霊し浅間社とし、八ツ家島は八幡神宮の「応神天皇^{おうじんてんのう}」を分霊し八幡社としました。

この様に松河戸の6島にあった9社の神社は、各島の崇敬神社の祭神を分霊しました。

そして、村、島の共同体の中心的機能を神社(寺)は果たすこととなります。

仏教伝来から続いていた神仏融合思想は、明治になると一転して国による「神仏分離」が行われます。明治政府が天皇の神権的権威確立のためにとった宗教政策で、政治的理想であった「王政復古・祭政一致」を具体化しようとしたものでした。

⑤ 1村1社合祀令



尾張徇行記の一部
 神社部分に6祠が掲載されている。
 尾張藩士樋口好古著文政5年(1822年)まとめた『郡村徇行記』
 なお、天保12(1840)松河戸村絵図には9祠描かれている。(p4参照)



資料 松河戸誌研究会 松河戸村江図天保12年(1840)から写したもの

- 白山神社に合祀又は境内社とした12社と御嶽社
- 門田島の白山社(同境内の伊弉諾尊、天照大神、大山津見命)
 - 道下島の津島神社(天王宮)・浅間社
 - 中小路島の市岐島社(弁財天)
 - 八ツ家島の八幡社(同境内の山神社、小野社)
 ※社天王社は、道下島の津島神社(天王宮)と合祀
 - 中島の熊野社(同境内の神明社、宇賀社)
 - 川原島の愛宕社(火防)(同境内の龍神社)、段下の斎宮社
 - 昌福寺境内の御嶽社
- ※9社の神社があったので「松河戸の九の宮(こののみや)」といわれていた。
 白山社の境内社に祀られていた伊弉諾尊・天照大神は熊野社へ、大山津見命は山神社へ合祀した。

明治の終わりごろから行われた「1村1社合祀令」は、神社は宗教ではなく「国家の宗祀」であるという明治政府の国家原則に従って「近代社格制度」を制定し、県で管理し地方公共団体が財政を負担できるまでに神社の数を減らすことにありました。

地方の自治は神社を中心に行なわれるべきだという考えのもと、合祀政策に一町村一神社の基準が当てはめられることとなり、神社の氏子区域と行政区画を一致させることで、町村唯一の神社を地域活動の中心にさせようとするものでした。

このことにより、10年足らずの間に、その当時全国的に約20万社あった神社の約3分の1が取り壊されたといえます。



白山神社境内社

松河戸においても、大正元年9月、松河戸の14社を白山社に合祀(4社)又は境内社(10社)とし、白山社を白山神社と称して村社としました。

氏子・崇敬者の側としては、反対集会を開くこともありましたが、主として大きな運動もできず、合祀によって廃された神社の祭神が祟りを起こしたなどと語る形でしか不満を示すことしかできませんでした。

合併された後の旧社地は畑地として開墾し、年貢を取って神社維持する費用にしていたのですが、終戦後、祟りがあるというので旧社地に小祠が建てられていました。

終戦後は一転して「政教分離」となり、「信教の自由」が保証され、昭和26年(1951)宗教法人法が制定施行されました。

明治以降愛知県知事によって管理されていた白山神社は「宗教法人」となり昭和27年9月に神社本庁の包括下となりました。

主祭神 四柱神

合祀社 祭神	内容	御神徳
白山社 菊理姫命 (くくりひめのみこと)	石川県白山比咩神社の主祭神 縁結びの神、農業神、水神、山神、海神	縁結び、夫婦円満、開運招福、 五穀豊穡、
八幡社 応神天皇 (おうじんてんのう)	八幡神社の主祭神 武運の神、鎮守の神 (総本社は大分県宇佐市の宇佐神宮)	勝利、頭脳
浅間社 木花咲耶姫命 (このはなさくやひめのみこと)	富士浅間神社の祭神 火の神、山の神、水の神、酒造の神	子受安産、子育ての神、火難消除、 農業等守護、家庭円満
津島社 素戔鳴尊 (すさのおのみこと)	国土経営を行う英雄人 武運の神、豊穡の神、学問の神	人々に幸運を授ける 疫病、厄難災除け

境内社(5社殿と御嶽社)

境内社(祭神)	御神徳	境内社(祭神)	御神徳	
① 熊野社(イザナギノミコト)	再生、人の縁、願いを結ぶ神	⑤ 山神社(大山津見命)	金運、子宝	
神明社(天照大神)	国家安泰		宇賀社(倉稲魂神)	穀物の神、福の神
② 市岐島社(市岐島姫命)	子守、水、芸能の神	齋宮社(三狐神)	厄除け開運	
③ 小野社(道風武大明神)	書、勤勉の向上			
④ 愛宕社(軻遇突智神)	火伏・防火		御嶽社(御嶽大権現)	(山岳信仰 御嶽講)
	竈神社(竈神)	防火、その家の富と命の守護神	資料	松河戸白山神社氏子会、

※ 大正元年に国による1村1社合祀令により、松河戸の島の神社9社(境内社5社と御嶽社)の15社の祠を、白山社に合祀(4社)又は境内社(10社)とし、白山社を白山神社(村社)とした。

ただし、八ツ家島(東組)の辻天王社は、津島神社に合祀してから白山社に合祀された。

また、昌福寺境内にあった御嶽社は、白山神社の境内社(5社殿)とは別に、不淨除(目隠し門)の右側に御岳山を模した小山に設置した。

白山神社(菊理姫命)、津島社(素戔嗚尊)、八幡社(応神天皇)、浅間社(木花咲耶姫命)

白山神社(白山社)の祭神は菊理姫命でしたが、「1村1社合祀令」により、大正元年9月に応神天皇、木花咲耶姫命、素戔嗚尊が合祀されました。

この地が、農業用水の供給に恩恵の大きい川のほとりにあり、遙かに白山を望むことができ、その白山比咩神社の祭神の「菊理姫命」を祭神として祀ってある白山社(白山神を水神に見立てていた)は、すでに村の中心の神社であって、明治5年に村社に列せられているので、各島の神社をまとめて松河戸の村社になったのは必然ですが、なぜ、この三神が白山社に合祀されたのでしょうか。

稲作地帯である松河戸の村の神社として、三神は相応しい神様であったと思われます。

また、多くの農村に最も崇拝されていた神社(神様)であったからでしょう。

○「菊理姫命」

白山最高峰の御前峰(2702m)にある白山比咩神社の祭神が「菊理姫命」ですが、なぜ「白山比咩大神」が「菊理姫」と同一神になったのかは、いろいろな説がありますが、正確な所は分からないそうです。

白山比咩神社は、加賀馬場の中心として栄え、比叡山延暦寺の末寺として多くの衆徒を擁し、全国に勢力をおよぼしました。

春日井市域の白山神社の祭神のうち、4社すべてに共通しているのは「菊理姫命」です。

菊理姫は謎の多い神様で、日本の歴史を記した日本書紀の神話の部分では一文のみ登場し、あとは謎に包まれた神様です。

菊理姫の御神徳は、日本書紀のイザナギとイザナミの争いの仲裁に入ったことから、結びの神(縁結び、夫婦円満)、白山の主祭神であることから農業神(五穀豊穰)などです。

○「素戔嗚尊(牛頭天王)」

白山神社の祇園祭は、津島神社の津島天王まつりが伝わってきたものといえます。

これは、道下島にあった氏神社が、津島神社から「素戔嗚尊(牛頭天王)」を分霊し、津島神社(天王宮)と呼称していたことから分かります。(創立 慶長11年(1606)勧請)

「天王」とは本名を「牛頭天王」といい、インドの「祇園精舎」の守護神と伝えられています。

- ・薬師如来の垂迹という「疫病から救う神」
- ・「海の神」
- ・「牛の角をもつ恐ろしい忿怒の鬼神」

この神が海を渡って日本に伝えられました。

6世紀、我が国に仏教が伝来すると仏教を受け入れるための融合思想として「神仏習合」が唱えられ、平安初期に「本地垂迹」として定着して、「牛頭天王」は「須佐之男命」として現れたと考えられました。

では、なぜ「牛頭天王」は「須佐之男命」と同一視されたのでしょうか。

古事記、日本書紀に「須佐之男命」は、イザナキ、イザナミから生まれた三貴神の一人で「海の神」、「荒々しいすさぶる神」であり、大蛇を退治した勇敢な姿が、仏法を守護し疫病を払う鬼神である牛頭天王と重ね合わされたと考えられています。

○「^{おうじんてんのう}応神天皇」

白山社に合祀される前は、村中の八ツ家島(現在の小野社の場所)に八幡社がありました。(創立 元亀年中(1570-1572) 当初の面積約 2,300m²とかなり広い場所であったと推測される)

その八幡社には、境内社として小野社と山神社がありました。

応神天皇は、「八幡さま」として広く親しまれる八幡神社の祭神で、実在したとすれば4世紀後半ごろの大王と推定され、弥生後期第 15 代に数えられる天皇になります。

大分県の宇佐八幡宮を総本社として、全国に4万余と最も多くの分社があるといわれており、清和源氏をはじめ全国の武士にとって武運の神様『弓矢八幡』として崇敬されてきました。

また、農村においては鎮守の神様(土地を守る神様)として親しまれてきました。

愛知県春日井市柏井町のかつての下街道沿いに八幡社があります。

古くは 下篠本郷に鎮座し、柏井の荘下条村、上条村、松河戸村、中切村、四つの土地を守護するために祀られた総鎮守でした。

また、戦前、松河戸新田の熊野(鳥居松村大字松河戸字熊山 3250 番)であった勝川駅の南((松新町4))の八幡社は、松河戸村の八幡社から分祀したとされています。

○「^{このはなさくやひめのみこと}木花咲耶姫 命」

白山神社に合祀される前は、河戸の道下島に浅間社がありました。

(創立 天正年中(1573-1585) 庄内川河川敷にあった。大正元年津島神社(天王社とともに白山神社に合祀)

木花咲耶姫は、富士浅間神社の祭神で日本神話に登場する女神です。

日本を代表する名山である富士山の神霊でもあります。

山の神の総元締である父の^{おおやまつみのかみ}大山津見神は、イザナギとイザナミの子なので、木花咲耶姫はその孫にあたり、山の神、水の神として祀られています。

非常に美しい神様で、桜の花の名の語源ともいわれており、『竹取物語』の主人公で、絶世の美女として描かれる「かぐや姫」のモデルともなっています。

天照大神の孫のニギ尊と結婚し、火の中で無事に3人の御子を出産し、その三男は山幸彦と呼ばれるホオリノミコトです。

子授けや安産そして、農業や漁業などの守護神でもあります。



『集古十種』より「応神帝御影」
菅田八幡宮 蔵

(4) かつての島の神々



松河戸には9社の神社(境内社は5社と御嶽社)があったので「松河戸の九の宮(このみや)」と言われていました。

現在は白山神社に合祀又は境内社となっている各島の神社についてみてみます。

(黒字は島の神社、赤字は島の神社の境内社であったもの、御嶽社は昌福寺にありました。)

① 門田島の神社

① 白山社くくりひめのみこと(菊理姫命) 白山神社に合祀 通称「うじがみさま」面積1,651m²

門田島の白山神社(白山社)の創建は明らかではありませんが、明応3年(1494)3月6日付の再建の棟札がありました。(現在は不明ですが戦前の神社の記録に棟札の文字は残されていた)。

白山社の祭神は菊理姫命でしたが、「1村1社合祀令」により、大正元年9月に八ツ家島の八幡社(応神天皇)、道下島の浅間社(木花耶姫命)と津島社の(素戔鳴尊)が合祀されて白山神社となり、他の社は白山社の境内社となりました。

白山比咩神社の祭神の「くくりひめのみこと菊理姫命」を祭神として祀っており、白山社(白山神を水神に見立てていた)は、すでにその当時村の中心の神社であった、明治5年に村社に列せられているので、各島の神社を集合し松河戸の村社とされました。

大正元年に熊野社に合祀され、白山神社の境内社として祀られていたはずの中島の熊野社の境内社神明社(天照大神)の御神体の所在が一時不明でしたが、本殿内に祀られていたことが分かり、平成10年5月2日に本来の熊野社に移され、その時に一番奥の扉の中が確認されています。

その時、御神体箱の由緒書により、白山社に「いざなぎのみこと伊弉諾尊」「あまてらすのおみかみ天照大神」「おおやまつみ大山津見神」の三神が境内社として祀られていたことが分かり、大正元年に①伊弉諾尊・②天照大神は熊野社へ、③大山津見命は山神社へ合祀されていたことが判明しました。

・石灯籠「白山宮」(高さ185)延享2年(1745)6月建立・同型の「丹羽献燈」石灯籠(高さ185)文化7年(1810)建立



「白山宮」石灯籠
延享2年(1745)建立
社殿に向かって右側に建っている。
白山神社に現存するもっとも古い石灯籠



真ん中が丹羽献燈」石灯籠
文化7年(1810)建立
社殿に向かって左側に建っている。
向かって左が「水神」、右が「白龍神」

○ 戦前の神社の記録に棟札の文字が残されていた

「奉造立一御前上肯明應參年甲寅三月六日敬白 大工山田莊上飯田藤原長久九郎兵衛 檀那庵実内道範浄金徳兵衛 近本弥七」

「奉再興上菴月一之王子願主敬白 慶長拾壹年丙午九月十五日」

「奉再興一王子 尾州東春日井郡柏井郷松河戸村敬白 大工藤原弥衛門 同茂左工門 社人丹羽源右工門 時二元和第九亥子(1)卯月十五日 本願 生田藤十郎」

裏面 矢野多左衛門 加藤善太郎 各々 檀那

註 (1)癸亥の誤りか。

① 東春日井郡の文字は、棟札から転記する際に、記入者が誤って当時の郡名を書いたものと思われる。

- ② この記録から推測すると、明応、慶長、元和の古い棟札を新しく一枚の棟札の表と裏にまとめて書き直したものと考えられる。
- ③ 慶長と元和の棟札には、奉再興とあるが、明応の棟札には、奉造立とあるので白山社の創建を伝えるものと考えられる。
- ④ この記録には「宝物 古代陶器高麗狛一對」とある。この狛犬は昭和の中頃まで、本殿前の廊下に安置されていた。

資料 郷土史かすがい 第53号白山信仰

○ 松河戸白山神社の御神像 菊理姫命の木造彩色立像

厨子の底には「寛政四年 鎮座 子四月朔日社僧 昌福現住禅應代 造立」とあり、社僧(別当寺)であった昌福寺住職禅応師の時に造立鎮座されたことがわかる。

御神像は背丈 20 センチほどの女神立像で、両手の掌を胸前で重ねた上に皿があり、その上にとぐるを巻き首を持ち上げた形の龍をいただく姿で、加賀白山大権現御神像によく似ている。

白山開山の泰澄大師が養老元年(717)に初めて白山に登り転法輪窟において 27 日間の祈念加持を勤めたところ、足下の翠ヶ池から巨大な龍が現れたという。龍の姿が消えると白衣綾羅の唐女のような女神が現れたので拜んでいると、十一面観世音菩薩のお姿になったと伝えられている。

当社の御神像は、この伝説に由来するものと考えられている。 郷土史かすがい 村中治彦氏から

松河戸誌研究会・白山神社総代 平成 10 年 5 月 2 日 神明社移転時拝観

② 道下島の神社

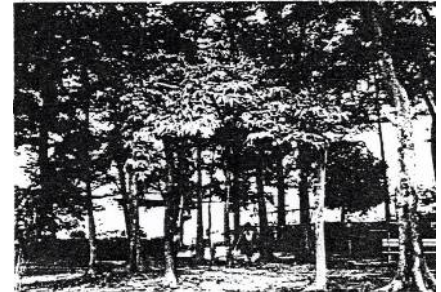
① 天王社(素戔鳴尊) 白山神社に合祀 通称「おてんのう」面積 720m²

権現 2 祠あり、どちらも東児童公園内で、河戸 744-1(保安林)面積 168.3m²と、河戸 745-1 面積 551.1 m²)

道下島の天王社(津島神社)の祭神は「^{すさのうのみこと}素戔鳴尊」で、津島市の津島神社から慶長 11 年(1606)勧請され創立されました。

(徇行記)

大正元年に白山社(白山神社)に合祀され、戦後跡地(東児童公園西南角)に小祠(津島神社の御札を御神体とした)が祀られていましたが、区画整理に伴い平成 9 年 10 月 28 日に白山社に移されました。



天王社(津島神社)の小祠
平成 9 年 10 月 28 日に白山社に移された

松河戸の祇園祭は他の村々より一段と盛んに行われていました。

白山神社の倉庫に保管されている馬道具の収納箱をみると、道下島の馬具収納箱には明治 5 年 6 月造之とあることから、道下島では天王社の祭礼時(祇園祭)に豪華な馬具を付けた飾り馬に標具をのせて奉納馬とするオマント行事がすでに行われていたこととなります。

他の島でもオマント奉納が行われるようになり、少なくとも 6 島で競い合う派手なお祭りは、道下島にあった津島神社から「素戔鳴尊(牛頭天王)」が白山神社に合祀合された大正元年以降とおもわれます。

② 浅間社(木花咲耶姫) 白山神社に合祀 通称「おふじさま」面積不詳

道下島の浅間社の祭神は「^{このはなさくやひめ}木花咲耶姫」で、創立は天正年中(1573-1585) (徇行記)とされています。



庄内川の堤防の河川敷辺りにあり、大正元年に同じ道下島の天王社(津島神社)とともに白山社に合祀されました。

富士山の神霊(富士浅間神社の祭神)でもある「木花咲耶姫」は、日本神話に登場する絶世の美女で桜の花の名の語源ともいわれ、『竹取物語』の主人公で絶世の美女として描かれる「かぐや姫」のモデルともなっています。

山の神の総元締である父の^{おおやまつみのかみ}大山津見神は、イザナギとイザナミの子なので、木花咲耶姫はその孫にあたり、山の神、水の神として祀られています。

天照大神の孫のニギ尊と結婚し、火の中で無事に3人の御子を出産し、その三男は山幸彦と呼ばれるホオリノミコトです。

子授けや安産そして、農業や漁業などの守護神でもあります

③ 中小路島の神社

① 市岐島社(市杵島姫命) ^{いちきしまひめ} 通称「べんてんさま」面積 99m²

中小路島の市岐島社の祭神は「市杵島姫命」で、広島県廿日市市の厳島(宮島)にある厳島神社の祭神です。

神社の宗像三女神として知られるきれいな女神を祭神としています。

宗像三女神の一人「市杵島姫神」は「弁財天」と同一視され、金運・財運の神とされています。

創立は不明ですが、大正元年に白山神社の境内社として祀られ、「弁財天」の標柱が白山神社の鳥居を入り右側に移されている。



「弁財天」石柱碑

④ ハツ家島の神社

① 八幡社(応神天皇) ^{おうじんてんのう} 白山神社に合祀 通称「おはちまん」面積 2,300m²

ハツ家島の八幡社の祭神は「^{おうじんてんのう}応神天皇」で、元亀年中(1570-1572) (徇行記)に島の鎮守の神として勧請されて道風公誕生地遺跡の中にもありました。

この場所は、通名を「城田」といい中世頃に城があったと言われていました。また小野道風の屋敷跡とも言われています。

八幡社の境内社として小野社、山神社があり、大正元年に八幡社は白山社に合祀され、小野社、山神社は境内社となりました。

八幡信仰は、大分県の宇佐神宮を総本社として全国で最も多く、全国に4万余と最も多くの分社があるといわれており、清和源氏をはじめ全国の武士にとって武運の神様『弓矢八幡』として崇敬されており、中世は各地で勧請が進み全国の農村においては鎮守の神様(土地を守る神様)として親しまれてきました。

春日井市柏井町のかつての下街道沿いに八幡社がありますが、古くは下



篠本郷に鎮座し、柏井の荘下条村、上条村、松河戸村、中切村、四つの土地を守護するために祀られた総鎮守でした。

また、戦前は松河戸新田の熊野(鳥居松村大字松河戸字熊山 3250 番)であった現在の勝川駅の南(松新町4)の八幡社は、この八幡社から分祀したとされています。

応神天皇は、「八幡さま」として広く親しまれる八幡神社の祭神で、実在したとすれば4世紀後半ごろの大王と推定され、弥生後期第15代に数えられる天皇になります。

『集古十種』より「応神帝御影」
誉田八幡宮 蔵

○ 八幡社の境内社^{おおやまつみのかみ}山神社(大山津見神)

八ツ家島の八幡社の境内社として山神社があり、「大山津見神」を祀っていました。

山の神である「大山津見神」と、その娘である「木花咲耶姫命」を祭神とした山神社は山岳信仰の神社で各地に鎮座しています。

農民の間では、春になると山の神が、山から降りてきて田の神となり、秋には再び山に戻るといふ信仰があり、ここでは農業守護神で、金運、子宝の御神徳があるとされてきました。

大正元年に白山神社の境内社となりましたが、その時白山社の境内社であった「大山津見神」も一緒に合祀されています。

○ 八幡社の境内社^{とうふうぶだいまりじん}小野社(道風武大明神)

八ツ家島の八幡社の境内社として小野社がありました。

ここは、小野道風公の屋敷跡と伝承されており「道風武大明神」(御神体木の木像)を祀っていました。

大正元年に白山神社の境内社となりましたが、その跡地は小野道風誕生地として住民の顕彰活動が盛んに行われました。

戦後、跡地に小野社を復興(小野小学校の奉安殿を社殿)して「道風武大明神」を祀り、昭和29年には小野道風公誕生地が、愛知県指定文化財史跡第1号に指定されています。

区画整理に伴い平成22年11月3日に祭神は白山神社に移されました。

跡地では毎年11月3日には道風祭が行われています。



旧小野社
平成22年11月3日に御神体は白山社に移された

② 八ツ家島(東組)の辻天王社(素戔鳴尊) 通称「おみよし」面積不詳

創立は不詳ですが、道下島の津島神社(天王社)の勧請の頃(1606)とされています。

八ツ家島の松川橋辺りにあった八ツ家島の東組の社でしたが、大正元年に津島神社に合祀されてから白山神社に合祀されました。

戦後小祠が祀られていましたが、区画整理に伴い平成9年11月16日撤収(補償額40万7千円)されました。

⑤ 中島の神社

① 熊野社(伊邪那岐命)(伊弉册尊) 通称「おくまの」面積2,019m²



中島の熊野社の祭神は「伊邪那岐命」、合祀熊野神社「伊弉册尊」で、熊野三山（熊野本宮大社〈本宮〉、熊野速玉大社〈新宮〉、熊野那智大社〈那智〉）の祭神である熊野権現の勧請を受けました。

熊野社の創立は慶長年中(1596-1610)で、境内社「神明社」「宇賀社」がありました。

大正元年に境内社であった「神明社」を合祀し、熊野社は白山神社の境内社となりました。

戦後跡地に小祠(熊野速玉大神の御札)が祀られていましたが、区画整理に伴い平成12年3月19日に白山社に移されました。

その時、白山神社にある「熊野社」の標柱も移されています。



○ 熊野社の境内社**神明社(天照大神)**

中島の熊野社の境内社「天照大神」として古くからの記録があり、張州府志、尾張徇行地には「熊野社内二伊勢熱田祠アリ」と掲載されています。

神明社とは、天照大神又は伊勢両宮を祀る社の総称で、島では伊勢講の日常参拝の対象として迎えました。

大正元年に熊野社に合祀され、白山神社の境内社として祀られていたはずの御神体の所在が一時不明でしたが、本殿内に祀られていたことが分かり、本来の熊野社に平成10年5月2日移されました。

○ 中島の熊野社の境内社**宇賀社(倉稲魂神)**

中島の熊野社の境内社として宇賀社があり「倉稲魂神」を祀っていましたが、大正元年に白山神社の境内社となりました。

「ウカノミタマ」即ち保食の神、豊作を祈る神であり、松河戸は「雲霞祭」も盛んでした。

「雲霞祭」は、うんか(ニカメチユウなど)の虫害を防ぐことを祈って行われ、毎年旧暦の6月中旬、土用の5日後に行われ、平成8年度まで行われていましたが、区画整理が進むにつれ水田が少なくなったことから9年度から廃止されました。

宇賀神は、日本で中世以降信仰された神であり、財をもたらず福神として信仰され、伊勢の国には式内宇賀社があります。

伏見稲荷大社の主祭神であり、「稲荷神」(お稲荷さん)として広く信仰されています。

⑥ 川原島の神社

① 愛宕社(軻遇突智命) 通称「おあたご」面積3,979m²

川原島の愛宕社の祭神は「軻遇突智命」で、京都府京都市右京区にある愛宕神社の祭神です。

旧称は「阿多古神社」といい、火伏せ・防火に靈験のある神社として知られ、「火廻要慎（ひのようじん）」と書かれた愛宕神社の火伏札は京都の多くの家庭の台所や飲食店の厨房や会社の茶室などに貼られています。水害に苦しむ当地では水の守り神でもあります。

愛宕社の創立は不明ですが、寛永12年に九左衛門という村人が京都の愛宕神社分霊したとも言われています。（徇行記では慶弔年中建立とされている）

旧社としては最大の面積があり(1,206坪)常緑樹が茂る森になっていました。

大正元年に愛宕社は、境内社の竈神社を合祀して白山神社の境内社として祀られました。その時「愛宕神」の標柱は齋宮社に移されましたが、平成12年3月区画整理に伴い齋宮社が白山社に移された時に「愛宕神」の標柱も一緒に移されています。

○ 愛宕社の境内社おきつひこのみこと おきつひめのみこと竈神社(奥津日子命)(興津比売命)

川原島の愛宕社の境内社として竈神社があり、おきつひこのみこと おきつひめのみこと「奥津日子命」、「興津比売命」の二神、かまじん「竈神」を祀っていました。

火所を守護する神聖な神として、この二神に火の神かぐつちのみこと(軻遇突智命)を加えて、仏神である三宝荒神におき替えられています。

大正元年に愛宕社に合祀され、そして白山神社の境内社として祀られました。

② 齋宮社(齋宮神)(三狐神) 通称「おしゃくじ」面積 1,238m²

段下(川原島)に齋宮社があり、慶長年中(1596-1615)に創建されました。(徇行記)

どこの元宮から勧請されたか不明で、伊勢の齋宮との関連は定かではありません。

大正元年に白山神社の境内社として祀られ、明治3年建立された三狐神の石柱も白山神社に移されました。

三狐神の1本の石柱が御神体で、狐の霊を祀り稲荷神社、宇賀社と同じく豊作の神と水難除けの神です。

戦後跡地に小祠(齋宮神 木製の御札)が祀られていましたが、平成12年3月13日区画整理に伴い白山社に移されました。

その時「齋宮社」の標柱と「愛宕神」の標柱が白山神社に移され、三狐神の石柱の右側へ並べられました。



三狐神

向かって右から
●「愛宕社」
●「齋宮社」
●「三狐神」
川原島の3社の石柱碑が並んでいる。



齋宮社小祠
遷座お祓い
平成12年
3月13日



※ 齋宮社の詳細な調査書「川原島 齋宮社覚書 平成12年4月」が保管されている。作成 岡島博氏

⑮ 昌福寺の御嶽社(御嶽大権現)

山岳信仰からくる御嶽講によって、「御嶽大権現」を祀っていました。



御嶽社は昌福寺にありましたが、大正元年の「1村1社合祀令」により、白山神社の境内社となり、島の境内社(5社殿)とは別に、不浄除(目隠し門)の右側に設置されています。

石造物を御嶽山を模して小山を築き、「御嶽大権現」の石像、御嶽光達、大峰山先達などの石碑が建てられています。

白山神社境内
「御嶽大権現」や「行者増」、「御嶽先達」「大峰先達」の石碑

【参考】

御嶽社 (山岳信仰 御嶽講)

この地域では江戸末期から御嶽講が結成され、明治以降隆盛となり、地域にいろんな分派が生じたが、松河戸では松河戸誕生講が行われていた。

4月29日の大講(4月から5月の吉日)には観音寺で御岳経ご祈禱やはっけ見が行われ、講員はお参りをした後会食をする。

また、夏(頂上奥宮)と冬(麓の里宮)には御岳登拝に参加し、ついでに大峯山も参拝した。

この先達となる人たちは、毎月宿を定め、覚明霊神の軸をかけ御岳経をあげる。

食事はなく茶菓子程度で冬の夜寒行の托鉢などをした。この様な行事も昭和50年代には衰退した。

誕生講は、牛山新田で農業を営んでいた丹羽多治右衛門が結成した。

彼は御嶽を開山した覚明を尊敬し18歳のころから毎年3度は御嶽山へ登り、先達となって近村の人々に御嶽信仰を勧めて登拝を続けていたが、次第に同志が増えたので、天保3年(1832)に牛山で結社した。

誕生講の多い地域は東春日井郡と名古屋市の一部を含め50ヶ村以上であった。

市内には、関田と下市場地区、松河戸(守山区川村と合同)、前並(小牧の誕生講稲荷教会に所属)の3派があった。

御嶽社は昌福寺にあったが、大正元年の「1村1社合祀令」により、白山神社の境内社となった。

石造物を御嶽山を模して小山を築き、「御嶽大権現」の石像、御嶽光達、大峰山先達などの石碑が建てられている。

郷土誌かすがい
御岳登拝の道から

○大峰山代参

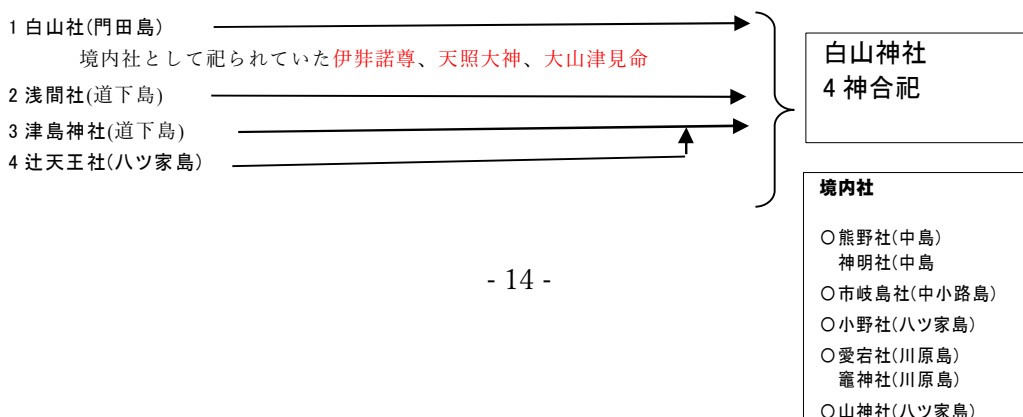
奈良県吉野の大峰山にある大峰山寺に参拝する古来からの土着の山岳宗教をいう。

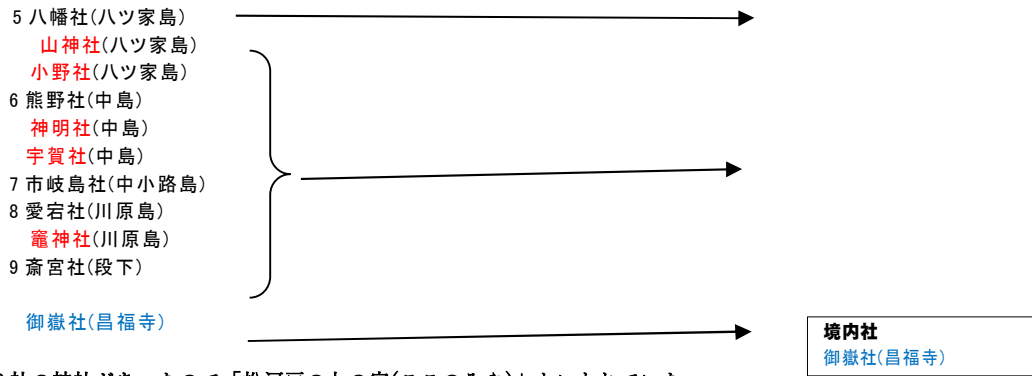
役行者(えんのぎょうじゃ)が開いた山のうち最初に開山され、修験道発祥の「霊峰」として崇められてきて、今なお女人禁制が続いている。

標高は1719mで、山頂には蔵王権現を祀る大峰山寺があり、「山の正倉院」とも呼ばれている。

大正元年の合祀・境内社以前

合祀、境内社以降





※ 9社の神社があったので「松河戸の九の宮(ここのみや)」といわれていた。

※ 赤字は各島の神社(九の宮)の境内社

※ 白山社の境内社に祀られていた伊弉諾尊・照大神は熊野社へ、大山津見命は山神社へ合祀した。

※ 境内社は5小祠9社と御嶽社

信仰分類別 全国で神社数の多い順 ()は総本社

神社本庁による「全国神社祭祀、祭礼総合調査(1990~1995)」

①八幡信仰(宇佐神宮) 約7900社 島の神社 八幡社	②伊勢信仰(伊勢神宮) 約4500社 島の神社 神明社	③天神信仰(北野天満宮)約4000社
④稲荷信仰(伏見稲荷大社)約2900社 島の神社 宇賀社、斎宮社	⑤熊野信仰(熊野本宮大社)約2700社 島の神社 熊野社、(王子神社)	⑥諏訪信仰(諏訪大社)約2600社
⑦祇園信仰(八坂神社)約2300社 島の神社 津島社	⑧白山信仰(白山比咩神社)約1900社 島の神社 白山神社	⑨日吉信仰(日吉大社) 約1700社
⑩山神信仰(不明)約1600社 島の神社 浅間社、山神社、御嶽社	⑪春日信仰(春日大社) 約1100社	⑫愛宕信仰(愛宕神社) 約900社 島の神社 愛宕社、竈神社
⑬三島・大山祇信仰 (大山祇神社、三嶋大社) 約700社	⑭鹿島信仰(鹿島神宮)約600社	⑯松河戸文化科学探求隊 隊長 長谷川 浩 080-3657-7052 松河戸町の沿革ホームページ http://matsukawado.com/
⑰住吉信仰(住吉大社) 約590社	⑱巖島信仰(巖島神社) 約530社 島の神社 市岐島社	